

文部科学省の被ばく医療研修

(山本尚幸、Mook 6 放射線災害と医療Ⅱ、医療科学社 2012、p.69-76)

2018年9月21日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

原子力安全研究協会では、平成 13 年度より文部科学省の委託を受け「緊急被ばく医療研修」を全国に展開している。この研修は、地域の緊急被ばく医療活動の実効性を確保することを目的に、地方公共団体職員、医療関係者、搬送関係者に対して「緊急被ばく医療のあり方について」を踏まえて、命の視点に立った対応、一元的な対応、そして地域の救急医療体制や災害医療体制と整合性を持った対応ができるように実施されている。また、東京電力福島第一発電所事故を踏まえて、問題点や対応についてディスカッションを行い、カリキュラムの改定を行っている。

研修の内容としては、各々の知識に応じた段階的な講座を開くといった体系化を試みている。それぞれ初心者を対象とした初級講座、実務者を対象とした基礎講座、専門的知識の習熟を目的とした専門講座を、原子力施設の立地道府県などで開催している。

初級講座では、初心者に必要な知識を座学で学んだ上で、地方公共団体職員、医療関係者、搬送関係者、事業所職員が混在した班をつくり、いくつかの状況の傷病者を想定してその対応について討論を行い認識の共通化を図っている。

基礎講座は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの 3 つ講座がある。基礎講座Ⅰでは、座学に加え、放射線測定器や個人線量計を利用した実習でそれらの使用法の基本と放射線の特徴を体感し、引き続いて、医療関係者は汚染を伴う傷病者に対する処置の実習、搬送関係者は汚染を伴う傷病者を搬送する訓練を行って、情報伝達、個人装備、救急車・処置室の養生、傷病者対応、後始末などを学習している。基礎講座Ⅱは新設された講座であり、行政担当、被ばく医療機関の薬剤師や放射線技師といった救護所活動に関わる人を対象として、住民スクリーニング、救護所設営、安定ヨウ素剤の調整や服用の説明を学習する予定である。基礎講座Ⅲでは主に診療放射線技師の方を対象として、WBC（ホールボディカウンタ）の使用法や線量評価を学習している。

専門講座は、様々な情報を元に自分で判断して行動できる地域のリーダー育成を目的として平成 21 年度から開始しており、Ⅰ、Ⅱの 2 つの講座がある。どちらも少人数制で実践、経験型の実習を行っている。専門講座Ⅰでは、搬送関係者を対象として、汚染環境における傷病者の救助や救急搬送を学習している。専門講座Ⅱでは JCO 事故、福島原発事故といった我が国で起こった非常に大きな事故に関して深く掘り下げることを通じて、医療関係者を対象として、多数傷病者対応、線量評価、急性放射性症候群の病態・治療、リスクコミュニケーション等を学習している。

これまでの実績としては、平成 23 年度までの 11 年間で、19 の道府県で講座を開催し、のべ 20032 人が受講した。緊急被ばく医療に関する知識を持つ人がきわめて少なかった時期から地域密着型で施行しており、被ばく医療関係者の裾野の拡大や連携の形成に貢献していると考えており、実際に震災後の福島でも、当研修の受講者や講師が多数被ばく医療に参画している。しかし、大規模な複合災害を経験し、真の専門家の育成や放射線災害時に即応できるような強いネットワークの形成は全く途上であると感じている。また、本研修の開催地域は原子力施設立地地域であるため限界があるが、他の枠組みの中で、非立地地域における緊急被ばく医療に係わる人材の裾野の拡大も重要ではないかと考える。

質疑応答ではシステム間の連携や、災害に対しての全体を指揮する司令塔をどの機関が行うかなどといった、日本全体として共通の方針を制定することが必要であると述べられている。